

「クロネコヤマトの卓球便」

この前ヤマトが配達に来たんで玄関を開けたら、若いお兄ちゃんが卓球のユニフォームを着て荷物を持っていたんです。僕が「え？」って顔してたら、「あ、この制服ですか。「卓球」と宅急便かけてるんです。」と言いついにもなっていない言い訳。「かけてるとかどうでも良いんで、ちゃんと制服着てください。不審ですから。」とクレームをつけたところ、
「いやーすみません。実は、昼休みに卓球に夢中になりすぎて、着替える暇がなかったんです。」とのこと。
そんなことあるのかよと思いついながらも余りに馬鹿馬鹿しくて、笑いをこらえながら（いや、実際少し笑ってたかも）荷物を受け取りました。

しかし、この間の日曜日も卓球のユニフォームで配達してるのを見ちゃったんです。耳をそばだてて聞いてたら、同じ説明してます。だから、受け取りの印鑑もらってる場所に割りこんで言ってやったんです。
「この人、以前僕に届けてくれた時も同じ言い訳してました。きっと嘘です」ってね。そしたら受け取り主の人は「嘘でも楽しませてもらったし良いじゃない」なんていうんですよね。
確かにそうだよなあと、ユーモアを笑えない自分が急に恥ずかしくなりました。で、配達員はさらに言葉をつぎます。
「実は、大野さんに届けた日はほんとに着替える暇なかったんです。けどあの日大野さんがくすっと笑ってたから…ついネタにしちゃったんです。」
なんて素敵なエピソードなんだと、当事者であることが嬉しくなっちゃいましたよ。受け取り主の人なんて少し涙してましたね。

感動を胸に玄関を後にしたところ、その配達員が
「いやーあの人、すっかりだまされてたね。うっける」とぬかします。
すかさず聞き返しました。
「え、ちょ、待てよ。あれも嘘かよ？」
「そりゃそうだろう。着替える時間もなくなるまで遊ぶなんて社会人として間違ってるでしょう。」
なんて真面目顔で言います。
「ちょっと、感動を返せよ！」
「あー、感動ね感動……」と云いつい荷台でなにやらごそごそやったあと、段ボール箱を持ってきて開けろと云います。箱には僕の住所と名前の書いた送付票が貼付されてます。開けてみたら、「感動」と大きく書かれた半紙が入ってました。呆れ果てた僕は「お前、おもしれーやつだな！」
ってことですかっけと意気投合してしまいました。

「ねー大野さん。さっきの玄関先のやりとりをさ、違う家でもやってみない？」

「あーまた割って入っていけばいいのね。」

今思えばこうして悪ノリしてしまったのがいけなかったんです。

何軒か廻っても、不在だったり、別に笑ってくれなかったり、荷物自体が重すぎて2人じゃなきゃ運べない都合でネタできなかつたり（僕がいなかったらどうしたんだか）、結構うまくいかないもんでした。

それでもトラックの中の会話は結構面白かつたりしてー

僕「なかなかうまくいかないんだね。」

配達員「ま、こんなもんですよ。」

僕「ああ、敬語使わなくて良いよ。」

配「や、ほら、大野さん一応お客さんじゃないですか。」

僕「ああ、もう君んとこ絶対使わないし。」

配「あはは、そうだよな。俺自身も俺みたいなのが配達員なら、絶対使わないし。絶対宅急便使うよな」

僕「え、どういうこと？宅急便なんじゃないの？」

配「ああ、うちは卓球便。ピンポンってお邪魔するじゃん？だから、卓球便。そんでもって、宅急便は登録商標だから使えないの。」

僕「え、え、えー！？！？」

配「ああ、登録商標だつて知らない人多いんだよね。」

僕「いや、そこじゃなくてさ。良いの？そんなパクリみたいなことしてて。」

配「え、まあジョークでしたサーセンで、なんとかならんかな？」

僕「いや、宅急便って言葉を登録商標取ってるくらいだし、そこらへんうるさい会社なんだと思うよ。」

配「ああ、じゃあ『僕もヤマトだと騙されてたんです』って言えばOKじゃない？」

僕「ああー、なるほどね。」

配「んで、『小さいころから御社で働くことが夢で…』」

僕「そしたら社長感動しちゃって『まがい会社とはいえ配達経験者なんだし、どうだいうちで働いてみないかい？』とかいってね。」

配「うは、それうまくいきすぎ。『僕、またお客さんからハンコもらっていいんすか？』みたいな」

僕「ははは、お前どういう趣味よ。」

配「ああ、でも卓球自体はほんとに好きなんだよね。」

僕「そうなの？俺も好きでさ、今度やろうぜ。」

配「ああ、うちの会社だったらタダでできるしね。」

僕「あ、卓球やるってのは本当なんだ。」

配「うん、うちみんな卓球好きだよ。だから実はこれが制服みたいなもんなんだわ。うち基本私服なんだけど、昼休み社員同士でいつもやってるから、じゃあユニフォームで仕事するか一みたいな感じで。」

僕「うわ、もうすごい適当。グリップはペン？シェーク？」

配「シェーク。会社の人はシェーク8割ペン2割だね。」

僕「へー。なんか中学のとき卓球部のやつもそう言った。」

配「そう、大体そうなるんだよ。卓球界ではこの現象を『神の見えざる手』と…」

僕「それはジョークだろ。」

配「まあジョークなんだけど、でもアダムスミスも言ってみりゃジョークみたいに言ったんだろうし。」

僕「そういやそうか。」

配「あ、そうだ。運送なぞなぞー。」

僕「え、なにになに？」

配「送り主さんは財布を送ったのに、受け取った人の箱にはワイフが入ってました。なぜでしょう!？」

僕「えーちょっと考えるわ。」

配「お、丁度いいことに到着だ。」

次の家は古くていかめしい家でした。玄関にはいかにも生真面目そうな老人が出てきてます。正直、あんまりあのネタはやりたくないなあと思ってたんですよ。印鑑を取って帰って来たタイミングで僕が飛び出して配達員につかみかかり、戻ってきたところで「こいつ常習犯なんです」という段取りになってたんで、

「印鑑じゃなくてサインにしてくれないかなあ」と祈りました。

しかし、祈りもむなしく老人は奥に戻ってしまったのです。よし、ここでやらなきゃ末代への恥だと思って、玄関先に飛び込んだのですが、

配「あ、やばいわ。」

僕「え、やっぱこの人そういうの嫌いそう？」

配「じゃなくて、荷物渡すの隣の家だ。ちょっとドアの裏にでも隠れてて。」

ふと見てみると、ここの表札は「笹谷」隣は「沢谷」です。伝票はカタカナで「サワタニ」と殴り書きだったために、見間違ってしまったんですね。

笹谷氏「ほれ、印鑑を持ってきたぞ。」

配「お客様大変申し訳ございません。お隣の沢谷様と間違えてしまいました。」

笹谷氏「な、なんだと!印鑑をわざわざ取りに行かせた上に間違いで、その上わしと犬猿の仲の沢蟹野郎の荷物を持ってきよったと抜かすか。」

うわ一動物の名前いっぱい出てきてるなあと思って聞いてたら、配達員が悲鳴をあげているのではないですか。どうしたのかとドア越しに覗いてみたところ、なんと印鑑が仕込み小刀になってるんです。配達員は突きつけられた状態で、必死に詫びています。

配「真に申し訳ございませんでした、笹谷様。」

笹谷氏「せっかく笑点をみてたところを邪魔しおって。ゆるさんぞ！」

あ、この人笑点見るなら、笑いで切り抜けられるか？

配「は一、私どもクロネコヤマトではCMでもっておりますように『一步前へ』が社訓でして。生真面目だけどちょっと抜けてる私なんかは、こう、たまに一軒前へお届けしちやったりもして…」

—こいつほんとに口うめ—な。

笹谷氏「ほ—うまいことを言いおる。ただわしはヤマトが嫌いなんじゃ。息子も佐川に勤めておってな。」

そう、そこで僕は丁度ひらめいたのです。

僕「あ、ならちょうど良いじゃないですか。「サ」が「ワ」に見えちゃって間違っただですよ。ほら、この送付票見てください。」

笹谷氏「なにになに、ほ—なるほど。そうかそうかヤマトのくせに「サ」が「ワ」になったと。おぬしどこの誰か知らぬが面白いことを言うな。ほれ、もうよいわヤマトよ。とつとつ行け。」

こうして僕たちはなんとか事なきを得て、笹谷家を離れました。沢谷さんの家では特に何もなくて(サインだったのでネタもできず)、荷物も今日はこれで最後だったので、そのまま家まで送ってくれました。

失敗したのが、今度卓球しようって約束していたのに連絡先を聞くのを忘れてしまったんですよ。

彼の会社を電話帳で調べても載ってないんですよ。まあ、パチモン会社ですからね。あの運送なぞなぞの答えも気になるし(いくら考えても分からない)、またなんか届けに来るのを気長に待ってみます。